

# 兵庫県立 考古博物館 NEWS

Vol.30



Hyogo Prefectural  
Museum of  
Archaeology



2022 Autumn-Winter

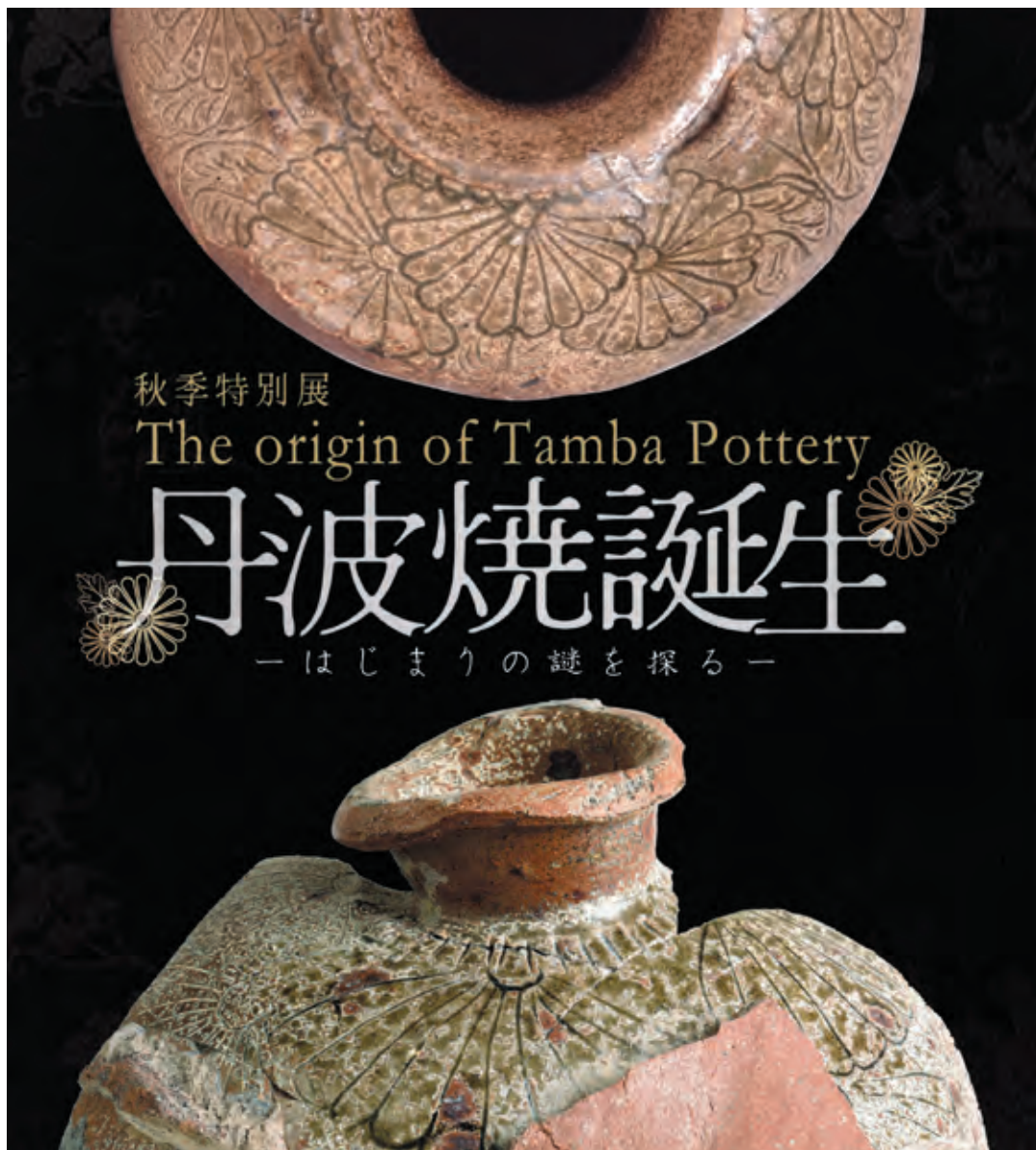
2022年秋冬号

- 秋季特別展「丹波焼誕生—はじまりの謎を探る—」
- 体感弥生塾(TKY48)結成!—ボランティアとともに博物館を元気に—
- 加西分館「古代鏡展示館」秋季企画展「儀礼の器—商周青銅器—」

秋季特別展 『丹波焼誕生 —はじまりの謎を探る—』

期間：令和4年10月1日(土)～11月27日(日)

窯跡から出土した刻画文陶器から、近年の資料調査で明らかになった  
丹波焼の成立について紹介します。



上 丹波菊花文三耳壺(個人蔵 愛知県陶磁美術館寄託)【重要文化財】  
下 丹波菊花文壺(三本峠北窯跡灰原出土 当館蔵)

日本六古窯の一つとして知られる丹波焼。その始まりについては長らく謎に包まれていました。解明のきっかけとなったのは、昭和52(1977)年に行われた丹波焼最古の窯の一つである三本峠北窯跡(丹波篠山市)の発掘調査です。この調査では、それまで周辺の窯跡では見たことのない、菊花文、蓮弁文などの絵が刻まれた陶片(刻画文陶器)が多数見つかりました。近年、これら陶片の再整理を行い、昨年度調査報告書を刊行しました。それをもとに今秋、特別展「丹波焼誕生 - はじまりの謎を探る -」を開催することになりました。

丹波焼が生産された地域は、旧国名で示すと丹波・摂津・播磨の国境に位置し、周辺では古代から須恵器生産が活発に行われていました。そのことから、従来丹波焼は須恵器生産を基盤に成立したと考えられていましたが、確かなことは分かっておらず、成立の経緯は長く謎に包まれていました。

そうした中、45年前の昭和52年、丹波焼の郷である丹波篠山市今田町の道路工事用地で窯跡が見つかり、三本峠北窯跡と名付けて事前発掘調査を行うことになりました。窯跡本体ではな

く、灰原(焼き損じた製品の捨て場)の調査ではありましたが、この時が丹波焼の窯の初めての発掘調査となりました。見つかった陶片はひどくゆがんだものばかりで、原形がわからないものも多くありましたが、常滑焼に形が似ている甕の陶片や壺に絵が描かれた陶片がいくつも発見されました。これらは、常滑焼、渥美焼などの東海地方で生産された灰釉陶器と類似していることから、丹波焼の源流が東海地方の焼物にあることがわかってきました。

三本峠北窯跡出土で特筆すべきは、壺に絵が描かれた多彩な刻画文陶器です。表紙の重要文化財の菊花文三耳壺(個人蔵・愛知県陶磁美術館寄託)と同じ文様の菊文の陶片をはじめ、草花文、蓮弁文、三柏文、動物文など多様な文様が刻まれた陶片は、従来知られていた焼き締めの丹波焼のイメージを覆しました。

本展ではこれら三本峠北窯跡の出土資料を中心に、丹波焼と常滑焼、渥美焼、珠洲焼などの各産地の刻画文陶器を比較しながら、丹波焼の系譜とそのはじまりについて紹介します。

(学芸課 松岡 千寿)



ひずんだ蓮弁文壺(三本峠北窯跡 当館蔵)



上からみた三柏文壺(三本峠北窯跡 当館蔵)

### 担当学芸員の紹介



専門は日本の陶磁器で、特に兵庫県の地場産業である丹波焼の研究をしています。考古博物館に勤務して9年目にして、はじめて陶磁器の展覧会を担当します。

丹波焼は、丹波篠山市今田町で、800年前から続くやきものです。現在も約60軒の窯元が生産を続けています。丹波焼の長い歴史を研究しながら、丹波焼の伝統と伝統に基づいたこれからの丹波焼の可能性について、日々考えています。



ティーケーワイ フォーティーエイト

## 体感弥生塾(TKY48)結成! — ボランティアとともに博物館を元気に —



参加体験型の新しいスタイルの博物館として誕生し、今年15周年を迎える当館にとって、博物館ボランティアはなくてはならない存在です。これまで博物館が主催する古代体験講座や各種イベントへの協力にとどまらず、ボランティア有志が設立した「ひょうご考古楽倶楽部」が主催する、人形ながしや餅つき、紙芝居など様々なイベントが、博物館を盛り上げてくれています。

コロナ禍によりボランティアの活動は制限され、博物館への足も遠のくような状況が続いていましたが、アフターコロナに向けて、博物館を元気づけるために、新しい取り組みが必要でした。

当館のボランティアはモノづくりに関心のある人や経験のある人材が豊富です。そこで、モノづくりを通して古代人の技術や知恵にふれ、それを来館者に伝えることを目的とする事業を企画し、ボランティアに参加者を募ったところ、48人(職員を含む)のメンバーが集い、4月に「体感弥生塾(TKY48)」と命名したプロジェクトがスタートしました。



川田川での結晶片岩探し

塾の第1期プロジェクトは弥生時代の道具による丸木舟の製作です。

自作の磨製石斧で丸太を削って丸木舟をつくるという目標に東京都立大学の山田昌久特任教授や徳島大学中村豊教授などの専門家もご賛同いただき、協力をご快諾くださいました。



斧の柄の製作(手前)と石斧の製作(奥)

4～6月は事前学習で道具について学び、加古川や徳島県吉野川支流の川田川の河原で、材料となる石斧用石材の採取を行いました。7月から本格的にモノ(石斧)づくりを始め、10月中には丸木舟を作るための道具(磨製石斧や楔など)を完成させます。11月5日(土)に開催される古代体験フェスティバル(播磨町の大中遺跡まつりと同時開催)で、自作の石斧で丸太を削るイベントに一般の方にも参加いただき、丸木舟づくりをスタートさせる予定です。1年か2年先には海に浮かべるという夢に向かって、根気よく続けていきますので、今後のTKY48の活動にご期待ください。

(学習支援課 藤田 淳)



磨製石斧の原石と製作途上品、完成品など

## 古代鏡展示館秋季企画展

## 儀 礼 の 器 — 商周青銅器 —

期間：9月17日(土)～3月12日(日)

中国における青銅器の出現は、紀元前18世紀頃までさかのぼります。それは王朝の誕生とも関連し、その後国家が形成される過程で制作技術は著しく進歩し、精巧な優品が制作されています。

商(殷)時代(紀元前17世紀頃～紀元前11世紀頃)は、青銅器の制作が本格化し、最盛期を迎える時代です。そして制作された青銅器の多くは日常生活で用いるものではなく、王やその一族など限られた階層の人々が行う儀礼(れいき)の場で用いた器、礼器でした。

礼器は用途により酒器、食器、水器などに分類されますが、儀礼は飲食物を神に供え、饗宴を伴う内容で行われることから、特に酒に関わる器と、食に関わる器が発達します。

紀元前11世紀頃、王朝が商から西周へ交替する中で王らが行う儀式に変化がみられ、それに伴って礼器の中で食器の比重が高まり、酒器は次第に衰退します。

今回の展示では、商～西周時代の儀式の中で用いられた青銅礼器のうち、酒器、食器の代表的な器種を展示します。複雑な形の中に精細な紋様がぎっしりと施された器。それは、高度な鑄造技術を用いて制作され、古代中国の精神文化を象徴するものです。この機会にぜひご観覧ください。

(古代鏡展示館 事業課長 長濱 誠司)



商時代前～中期の酒器(当館蔵)



獸面紋卣(商時代後期：個人蔵)



触れる・体感する、考古学のワンダーランド。

**兵庫県立考古博物館**  
Hyogo Prefectural Museum of Archaeology

■休館日：月曜日(祝休日の場合は翌平日)

〒675-0142

兵庫県加古郡播磨町大中1-1-1

TEL 079-437-5589

FAX 079-437-5599



考古博物館 HP

—— 兵庫県立考古博物館 加西分館 ——  
**古代鏡展示館**  
Hyogo Prefectural Museum of Ancient Bronze Mirrors

■休館日：水曜日(祝休日の場合は翌平日)

〒679-0106

兵庫県加西市豊倉町飯森1282-1

兵庫県立フラワーセンター内

TEL 0790-47-2212

FAX 0790-47-2213



加西分館 HP

**兵庫県立考古博物館NEWS**  
vol.30 2022 Autumn-Winter

発行年月日 令和4年8月31日

編集・発行 兵庫県立考古博物館

〒675-0142 兵庫県加古郡播磨町大中1-1-1

TEL.079-437-5589

FAX.079-437-5599

<https://www.hyogo-koukohaku.jp/>